

銃・疫病・資本
 ——Marlowe 作品現存原稿から照射した
The Massacre at Paris——

佐野 隆 弥

1. *The Massacre at Paris* の位置

一般的に、Christopher Marlowe の後期作品は、創作年代を特定することが困難であると言われている。比較的最近の Marlowe に関する概論的研究書である、Patrick Cheney の編集による *The Cambridge Companion to Christopher Marlowe* (2004) に添付された“Chronology”でも、1588年から1592年までという5年間のスパンの中に、*Doctor Faustus*, *The Jew of Malta*, *The Massacre at Paris*, *Edward II* の4作品を配当した上で、“the order of composition and the precise dates remain uncertain”との断り書きが付されている。¹ 本論で分析の対象とする、この後期作品の1つ *The Massacre at Paris* (以下、*The Massacre* と略記) は、*Tamburlaine the Great* 2部作なども含めた Marlowe のキャンソンの中で、おそらくは最も等閑視されてきた戯曲の1つだと言っても過言ではないであろう。

その理由は、いくつか指摘することが可能だが、最も根本的な原因は、そのテキストの状態にある。現行の *The Massacre* の各エディションは、おそらく1602年に出版された年代不詳の8折版(octavo)をその根底に置いているが、この8折版には、“THE MASSACRE AT PARIS: With the Death of the Duke of Guise. As it was plaide by the right honourable the Lord high Admirall his Seruants. Written by Christopher Marlow.”とのタイトルが付され、Edward Alldeによって出版されているが、書籍商組合への登記はなされていない。*The Massacre* の上演に関しては、“the tragedey of the gvyes”という見出しで1593年の1月にストレインジ卿一座の、また1594年6月から9月にかけて海軍大臣一座のレパートリーとなっていたことが、Hensloweの*the Diary*より読み取れ、かなりの利益をもたらしたことが記録されている。

現行の *The Massacre* の第 1 の問題点はその短さで、1250 行程度しかなく、Marlowe の他作品のおおよそ半分程度の量しかない。その上、25 行を越える長めの台詞は 3 箇所のみで、1 行もしくは 2 行の台詞は逆に 225 箇所も存在する、とレヴェルズ版の編者 H. J. Oliver は指摘している。² さらに、台詞の質的な面での様々な異常が、第 2 の問題点となる。いま言及したばかりの台詞の長さの不均衡さに加えて、かろうじて弱強 5 歩格と認識できる程度の乱れた詩形、そして最も不自然で疑義を抱かせるものとして、台詞の繰り返し、特にフレーズ単位での語句の反復を挙げておこななければならない。この語句の反復とは、同一戯曲内つまり *The Massacre* 内部での反復（この場合、ごく直近の台詞の繰り返しもあれば、数場離れた表現の反復のケースもある）のみならず、他の戯曲（Marlowe 自身の作品は言うに及ばず、他の劇作家の戯曲——例えば *Arden of Feversham* (1591)）と台詞をシェアするような事例も観察することができる。

このような状況を踏まえて、*The Massacre* の 8 折版は一般に、「めった切りにされた」（“mangled”）テキストであると考えられていて、その原因は「記憶による再構成」（“memorial reconstruction”）のためである、と Oliver は考えている。³ Oliver のこの指摘がなされたのが 1968 年、その 36 年後の 2004 年に、Laurie E. Maguire は、先に言及した *The Cambridge Companion to Christopher Marlowe* の中で “Marlovian texts and authorship” の章を担当し、そこでもやはり現存の 8 折版は「短縮化」（“abridgement”）と「記憶による再構成」を経て生成されたものである、と述べている。⁴

以上のように、現存の *The Massacre* は極めて不完全な状態にあるため、Marlowe の作品であることはよいとしても、この戯曲の中に Marlowe 自身のイデオロギーや主義主張を読み込むこと、あるいは特定の登場人物に関するアプローチを試みることなどは、かなりのリスクを伴う作業であり、仮に試みるとしても相当の留保を付けた上で、行われなければならないものだと考えられる。

しかし、この *The Massacre* には、本作品のみならず、Marlowe の戯曲全体にとっても、非常に興味深いマニュスクリプトがフォルジャー・シェイクスピア図書館に残されている。本論の議論に関わる冒頭の 27 行を以下に引用する。

Enter A souldier wth a muskett

Now ser to you y^t dares make a dvke a cuckold
and vse a counterfeyt key to his pryve chamber
souldier thoughe you take out none but you^r owne treasure
yett you putt in y^t displeases him / And fill vp his rome y^t
he shold occupie. Herein ser you forestalle the markt
and sett vpe yo^r standinge where you shold not: But you will
saye you leave him rome enoughe besides: thats no answe
hes to have the choyce of his owne freeland / yf it be
not to free theres the questione / now ser where he is
your Landlorde you take vpon you to be his / and will needs
enter by defaulte / whatt thoughe you were once in possession
yett comminge vpon you once vnawares he frayde you
out againe. therefore your entrye is mere Intrvsione
this is againste the lawe ser: And thoughe I come not
to keep possessione as I wold I mighte yet I come to
keepe you out ser. yow are wellcome ser have at you

Enter minion

He kills him

minion Trayterouse guise ah thow hast mvrthered me

Enter guise

Guise Hold thee tale soldier take the this and flye *Exit*

thus fall Imperfett exhalatione

w^{ch} our great sonn of fraunce cold not effecte

a fyery meteor in the fermament

lye there the kinges delyght and guises scorne

revenge it henry yf thow liste or darst

I did it onely in dispyght of thee (1-27)⁵

このマニョスクリプトは、レヴェルズ版の第19場冒頭に相当するもので、ここでは Guise 公爵に雇われた兵士が、フランス国王 Henri III の寵臣 Mugeroun をマスケット銃で射殺し、その死体を Guise 公爵があざけるといふだけの、マニョスクリプトでは 36 行、8 折版では 16 行ばかりの非常に短いものである。Guise が Mugeroun を暗殺した理由は、Mugeroun が Guise

公爵夫人と性的関係を持っていて、その情事をネタに Henri III が公的な場で Guise を愚弄し、その不名誉に Guise が激怒したためであった。

いま問題にしているマニュスクリプトは、最初 J. P. Collier の手で印刷されたため、Collier による捏造の疑いも持たれたが、J. Q. Adams が 1934 年に発表した論文によって、その可能性は否定された。⁶ Oliver は、このマニュスクリプトが “holograph” つまり Marlowe の自筆原稿である可能性を示唆しているが、MaGuire はそれをきっぱりと否定している。しかし、両者とも、程度の差こそあれ、このマニュスクリプトが実際の上演に関わる位置にあった点では一致していて、この残存原稿を考える上で、この視点は重要な意味を有するように考えられる。⁷

2. The Collier leaf を梃子にして

本論の目的は、書誌学上の注目とは裏腹に、*The Massacre* の内容面あるいはドラマトゥルギーの面で、従来ほとんど顧みられなかったこのマニュスクリプト（以下、the Collier leaf と呼称）該当場面にあらためて光を当て、そのことを通してこの戯曲の構成や構造を再考し、可能であれば Marlowe における同時代言説のサーキュレーションを探ることにある。そして、その際のキーワードがタイトルに掲げた、3つの項目「銃・疫病・資本」となる。

先にも言及したように、the Collier leaf の場面に登場し、独白する人物は Guise 公爵に雇われた無名の兵士、つまり劇中で展開される権力闘争の末端に位置付けられる端役である。しかし、この兵士が語る台詞の内容は、権力の中核に関わる人物たちをめぐるセンシティブな話題と、それに対する距離を保った客観的なコメントであり、この兵士の機能とは、結局、観客の反応を導き、その劇のそれ以降の展開にある特定の意味や方向性を付与する視点人物としてのそれであり、演劇用語で言うところの狂言回しの働きと考えることができるであろう。この種の機能的人物は、Shakespeare 劇においても、例えば、*Richard III* (1593) における代書人 (scrivener) や *Macbeth* (1606) における門番 (porter) など、よく知られた存在であり、彼等が語るモノローグもやはり同様の効果を与えている。⁸

ところで、こうした狂言回しの人物の機能と効果が、いま述べたように重要であるのならば、われわれは、該当する場面にそれに見合う注意を払うべきであろう。そこで the Collier leaf の場面を検証すると、このケースで先ず真っ

先にインパクトを受けるのが、兵士がマスケット銃でターゲットを暗殺するという行為そのものである。エリザベス朝演劇には、種々様々な暗殺や殺人の場面が舞台化され、また報告の形で伝達されたりもするが、長い銃身を有する銃による殺害は極めて珍しく、10回以上の殺害シーンが演じられる、この *The Massacre* においても、この箇所以外には存在しない（資料「*The Massacre at Paris* 展開図」を参照）。

3. Marlowe とマスケット銃

しかし、本論がマスケット銃に注目するのは、ただ単に現象的な希少価値からだけではない。それに加えて、ここには、Marlowe のマスケット銃に対するこだわりと呼ぶものがあるからであり、それを裏書きする根拠を2点指摘しておこう。

先ず1点目は、*OED* によるデータである。*OED* ヴァージョン3の“musket²”という見出しには、“1. A hand-gun of the kind with which infantry soldiers are armed.”という定義が与えられ、1587年頃の Sir R. Knyghtley が初例として挙げられ、1590年の Sir J. Smyth や 1595年の R. Johnson が続けて引用されている。さらに興味をそそるのが、“musketeer”の1590年の初例に Marlowe の *Tamburlaine* 第2部からの台詞が取られている点である。*OED* のデータを信頼するならば、1580年代前後から、マスケット銃が文献に現れ始めたということになり、そのことは、実戦におけるマスケット銃の使用が、そのあたりの時代から顕著になってきた、あるいはマスケット銃の重要性が増し認知度が高まったことを反映していると判断してよいと考えられる。つまり、Marlowe は、イングランドにおけるこの兵器の存在感の高まりに強い関心を示していることになる訳である。

そこで、その推論を確認するために、ヨーロッパにおけるマスケット銃導入の歴史をサーヴェイしておく必要がある。火縄銃あるいはマスケット銃という名称は、いわゆる鉄砲タイプの火器の呼称として広く使用されていたため、厳密に同定をした上で議論を行うことは困難であるが、大砲とは異なる小口径の火器が決定的な役割を果たしたヨーロッパにおける最初の戦闘は、1419年から10数年にわたってボヘミアで戦われた宗教戦争である、フス戦争だと言われている。その後、同じ15世紀には、百年戦争の最終段階や、スペインでのレコンキスタでも、この火縄銃は大きな活躍をしたとされている。そして16

世紀に入って1520年頃、スペインで改良が行われた結果マスケット銃が誕生することになるが、当初は大型で扱いにくく、また命中精度の低さや火薬の装填に時間がかかるなどの理由で、補助的な位置に甘んじていた。しかし、戦術の発達——例えば、世界史的に見ても重要な戦闘事例の1つである、織田信長の長篠の戦いでの画期的な射撃法——により、徐々に重要性を増してゆく。長篠の戦いが1575年、*The Massacre*が取材したサン＝バルテルミの虐殺は1572年——ほぼ同時代の出来事であるが、マスケット銃はその後もアメリカ大陸の植民地化のプロセスなどで重要な武器となり、小型火器として注目されてゆくことになる。Marloweが舞台にマスケット銃を持ち込んだのは、こうした流れの中であった。

では、次に第2の根拠について検証してみよう。*The Massacre*の材源に関わる問題である。

A ces mots il[=S. Megrin=Mugeroun] sortit du Louvre; & à peine avoit-il fait quelques pas, qu'il se vit chargé par les assassins...il fut percé de plusieurs coups mortels, & laissé pour mort sur la place.⁹

これは、*The Massacre*の材源、特にサン＝バルテルミの虐殺関連の同時代のパンフレットを調査したP. H. Kocherの論文からの引用だが、引用箇所は、Guise公爵夫人の愛人の暗殺を描き出した部分である。簡単な日本語訳を当てておくと、「こう言った後に彼はルーブル宮殿を出たが、何歩も歩かないうちに彼は複数の刺客に襲われたのである……。彼は何度も刺されたのが致命傷となり、放置されてその場で死んだのである」となる。Marloweが、Guise公爵夫人の愛人として創出したのはMugerounであったが、史実ではS. Megrinという人物がそれに該当し、公爵夫人の情事は世間でもよく知られたものようであった。¹⁰ さて、ここで注目したいのが、その愛人S. Megrinの殺害手段である。Kocherの提示する資料に依拠すれば、S. Megrinは「複数」の暗殺者に「刺殺」されたことになるが、Marloweはこの事件を演劇化するに当たり、これを単独犯による銃殺へとわざわざ変更したことになる。

ここまでの議論を整理すると、*The Massacre*のターニング・ポイントとなる重要な場面で、Marloweはあえて材源から離れ、軍事技術面で存在感を増しつつあったマスケット銃による銃殺という希有な演出を試みた、となるが、では、劇作家の意図とは何だったのであろうか。先にも述べたように、*The*

Massacre の現存の状態から Marlowe の意図を推し測ることは、極めて難しいであろう。しかし、現存のテキストから何らかの効果を考えることは可能であり、そのヒントはやはりマスケット銃にあると思われる。*The Massacre* の中で、殺害手段ではないもののマスケット銃が使用される箇所が、実はもう1つ存在する。レヴェルズ版で第3場、ユグノー側の大物 Coligni 提督がマスケット銃で狙撃される場面がそれである。この提督暗殺未遂事件が、結果的にサン＝バルテルミの虐殺の引き金となったことは、フランス史ではよく知られた事実であり、サン＝バルテルミの虐殺を描いた絵画等にはしばしば登場するものである。¹¹ ユグノー勢力の中心的人物数名を排除し、そのことによってカトリック勢力の維持と王権の安定を図ろうとした、ヴァロワ王朝と Guise 公爵等の意図とコントロールとは別に、新旧の宗教的対立はパニック状態の中で暴走し、最終的に1万人以上の犠牲者を生む虐殺へと展開した訳だが、マスケット銃による提督の狙撃は、その宗教的対立を象徴するものとして意味づけられ、そのインプリケーションはこの the Collier leaf の場面まで波及する——換言すれば、the Collier leaf までのアクションの展開を仮に *The Massacre* の前半部と呼ぶならば、その前半部の生成する劇的意味は、宗教的側面がドミナントであり、そのことを喚起するマーカーとしてマスケット銃は機能している——と考えられないであろうか。

4. *The Massacre at Paris* と疫病

このことを立証するために、もう1点、注目すべき台詞のやり取りを前半部から指摘してみたい。

- I. Now, sirrah, what shall we do with the Admiral?
2. Why, let us burn him for an heretic.
- I. O no, his body will infect the fire, and the fire the air, and so we shall be poisoned with him.
2. What shall we do, then?
- I. Let's throw him into the river.
2. O, 'twill corrupt the water, and the water the fish, and by the fish, ourselves when we eat them.
- I. Then throw him into the ditch.

2. No, no, to decide all doubts, be ruled by me: let's hang
him here upon this tree. (xi. 1-11) (下線は論者による)

これは第11場の冒頭、2人の人物が第5場で刺殺された Coligni 提督の死体処理について話し合う場面だが、異端者の焼却は炎に異端思想を感染させ、その炎が空気を汚染し、最終的にそれを吸入する人物をも感染させる、あるいは川に投げ込まれた死体が河川を汚染し、そこに生息する魚を汚染し、やはり最終的にその魚を摂取する人物を感染させる、という内容となっている。この感染経路に関する考察は、明らかに、当時ペストの感染原因について主流であったミアズマ説——環境の悪化が感染症を流行させる——を踏まえたものだが、ここで顕著なのは、疫病に適用されるべき感染理論が、異端思想の流布に引用されているということである。このような発想あるいは連想は、疫学が未発達 の時代にあっては至極ありふれたものと考えてよい訳だが、Keith Thomas の *Religion and the Decline of Magic* (1971) から、関連する記述を援用しておく。

This fatalistic view of disease seems to have been most commonly invoked with reference either to venereal disease, where the element of moral retribution seemed obvious, or to epidemics, particularly of plague, when the scale of the visitation cried out for explanation in terms of the sins of the whole community, or particular sections of it. Puritans, for example, attributed the epidemics to the toleration of the Catholics, to the theatres, to sabbath-breaking, or to the Laudian innovations.¹²

Thomas が述べていることは、要するに感染症天罰説に過ぎない訳だが、何らかの掟——この場合は宗教的コード——を犯す行為が、神の怒りを招き、そのことが環境を悪化させ疫病の猖獗へと繋がる、という発想の連鎖を特徴としている。該当の台詞に即して考えるなら、カトリックから見れば、ユグノーの存在自体が天罰を招来する掟破りの現象であり、そのことが一義的にはパンデミックの発生の懸念へとリンクする訳だが、ここで使用されている“infect”や“corrupt”にはこうした疫学的・病理学的意味は言うまでもなく、先にも触れたように、異端思想への「感染」や「墮落」といったコノーテーションも当然含まれていると考えるべきであろう。そして、このような異彩を放つ台詞

を前半部のちょうど中間点に置くことで、サン＝バルテルミの虐殺を中心に展開される *The Massacre* の前半部が、カトリックとユグノーとの、文字通り血みどろの対決を描き出す部分としてより一層鮮明に認識されると考えられる。

5.3 人の Henri と地政学

あらためて確認しておく、*The Massacre* という直近の過去の歴史を扱った戯曲は、1572年8月に執り行われた、ナヴァル王 Henri とフランス王 Charles IX の妹 Marguerite de Valois との、新教・旧教間の融和目的の結婚、およびそれに引き続いて生じたサン＝バルテルミの虐殺から、1589年の Henri III 暗殺とナヴァル王 Henri の Henri IV としてのフランス王即位までの、17年間のフランス史をカヴァーした作品である。

しかしながら、*The Massacre at Paris* というサン＝バルテルミの虐殺を前面に打ち出したタイトルや、すでに指摘した戯曲そのものの極端な短さのため、現存テキストの状態で見ると、この *The Massacre* は、新旧両宗派の争いで塗り固められた作品として受容されてきたように思われる。そしていま触れた2点の理由に加え、さらにナヴァル王 Henri の人物描写のあり方が、この傾向に拍車をかけていると考えられる。本劇の中で、ナヴァル王 Henri は、神に祈念し神意に従うことを行動方針とする、一貫して摂理を体現する人物として造型されているため、時に、Marlowe が創造した人物の中で最も精彩を欠く人物との評価を付与されることがある程である。こうした人物造型が、何らかの Marlowe の宗教的・政治的イデオロギーを反映した、意図的なものであるのかどうかは、テキストの状態から断定の仕様が無いが、少なくとも結果的には、ナヴァル王 Henri がプロテスタントを劇中終始一貫して背負って立つ人物として存在し続けるため、*The Massacre* という戯曲は、新教・旧教対立の構図をやはり終始一貫して保持し続ける、あるいはそれに類する効果を与え続けることになる。

もちろん、本劇が宗派の選択と政治統治とが一体化していた時代の歴史に取材した戯曲である以上、宗教的意味合いを完全にまぬがれた創作になるはずもない訳だが、それにもかかわらず、*The Massacre* の後半部が、通例「3 Henri の戦い」と呼称される、王位継承をめぐる政治闘争劇を中心に据えていることをあらためて確認し、その現象と the Collier leaf との間に「土地資本」という言説のネットワークが存在することを主張してみたい。

そのためには、先ずここで、当時のフランスがその中に置かれていた国際的な政治外交力学を押さえておく必要がある。15世紀終盤の1494年、時のフランス王 Charles VIII は、キリスト教世界の盟主となり、古代ローマ帝国を継承する普遍帝国すなわちヨーロッパ世界の覇権を求めて、イタリアへと侵攻する。フランス史で「イタリア戦争」と呼ばれるこの軍事侵略は、その後1559年まで数次にわたって継続されるが、結局イタリアに拠点を確保する試みは失敗に終わる。またこのイタリア戦争中の1519年、フランス王 François I は、神聖ローマ帝国次期皇帝選挙に立候補するが、スペイン王 Carlos I と争い敗退してしまう。こうしたヨーロッパの国際政治におけるいくつかの不首尾が、ハプスブルク・スペインとの対立関係を生じさせ、またフランス国内への撤退と、その結果としての国内への政治的集中と中央集権化を推進させることになった。

そうした中、Henri II の事故死を受けて即位した長男 François II は、わずか17ヶ月の統治で死去し、次いで次男の Charles IX が即位した時彼はわずか10歳にすぎず、このようにヴァロワ家の王権は非常に不安定な状態にあり、王権への求心力は低下の一途を辿っていた。その一方で、カルヴァン主義は国民のみならず、政治的中枢を占める高位貴族にも広く浸透し、新旧両派の小競り合いが続く中、1562年に Guise 公爵 François (Henri の父親) の軍勢がユグノーを虐殺する事件が起こり、ここからフランスにおける宗教戦争が始まり、やがてサン＝バルテルミの虐殺へと展開することになる。

宗教戦争中のフランス、特にサン＝バルテルミの虐殺以降のフランスは、従って、「*The Massacre* 展開図」の3つの縦棒で示しておいたように、3極の政治勢力間の危ういバランスの上で統治されていた——すなわち、プロテスタント勢力のリーダー格であるナヴァル王 Henri、フランス王位を虎視眈々と窺うカトリック勢力の中心的存在である Guise 公爵 Henri、そしてこの拮抗する2大勢力の上でかろうじて王権を維持するヴァロワ家の Henri III、の3極である。

サン＝バルテルミの虐殺後、カトリックの思惑とは裏腹に、ユグノーの勢力は予想された程減退することはなく、むしろカトリックに対する徹底抗戦の方向が強化された。こうした状況下に即位した Henri III であったが、劇中にも描かれている寵臣との（おそらくは、Marlowe 好みのホモセクシャルな）関係や、スペインとの戦争での敗北により威信を大きく失墜させていた。そのような時局の流れの中で、重要な局面の変化が訪れる。1584年6月に Henri

III の弟 Alençon 公が死亡し、しかも Henri III には男子の後継者がいなかったことに加え、サリカ法典の規定もあって、王位後継者の第 1 位がナヴァル王 Henri となるという事態が生じたのである。この衝撃に色めき立ったのが、Guise 公爵 Henri を中心に、パリなど拠点都市をメンバーに 1576 年に結成されていたカトリックの過激派の組織「カトリック同盟」で、彼等はスペインの後ろ盾を得ながら、ナヴァル王 Henri の王位継承を阻止するために、Henri III に圧力をかけ、やがて 1588 年 5 月 12 日に発生した「パリケードの日」では、Guise 公爵に対する支持は最高潮に達し、逆に Henri III に対してパリ市民は暴動を起こすことになる。

さて、ここまで、サン＝バルテルミの虐殺を間にはさんだ、前後 100 年ばかりのフランスの歴史を概観してきた訳だが、宗教戦争と連動してここで重要なファクターが 2 点存在する。それは (1) ハプスブルク・スペインに挟撃されたフランスの地政学的位置、および (2) パリなど主要都市あるいは主要地域における支配権の問題である。(1) に関してはすでに触れたように、当該時期のフランスは、ハプスブルク家が統治する東の神聖ローマ帝国と西のスペインにはさまれる位置にあり、取り分け、フランス王位を狙うカトリック勢力の首領 Guise 公爵 Henri がスペインと結託していた状況は、劇中数度にわたって非難の対象とされている(『*The Massacre at Paris* 展開図」における下線部参照)。(2) に関しては、パリの暴動が劇中のアクションの一環として提示される訳ではないが、その報告自体が、劇中において、Henri III が Guise 公爵を暗殺する重要な動機となっていることに相違はない。

6. The Collier leaf と土地資本

以上の説明により、*The Massacre* の後半部が、「3 Henri の戦い」と呼称される、王位継承をめぐる政治闘争劇を描写していることが、理解できるであろう。そして、この「3 Henri の戦い」という政治闘争劇が、地政学的な力学や、拠点都市・地域のコントロールの問題と深く関わっていることも、同様に明らかになった。そこで、この点を踏まえた上で、the Collier leaf の台詞に再び舞い戻り、検証してみると何が見えてくるであろうか。

The Collier leaf における無名兵士の独白の特徴は、本来であれば、Guise 公爵が独占支配権・占有権を行使すべき対象である公爵夫人の性的な資源を、Henri III の寵臣 Mugeroun が許可なく非合法的に領有したことを当てこすっ

た点にあり、“occupie”に代表される性的当てこすり (sexual innuendo) は、エリザベス朝演劇では常套的な用法でもある。しかしながら、この兵士のモノローグで取り分け顕著なのは、土地資本への執拗な言及だと言ってよい。通常、女性に対する性的支配への両義表現 (double entendre) では、生殖器官の形状から「門 (gate)」や「空間 (room)」といった比喩が多用される傾向にあるが、この the Collier leaf では、“markett”, “freeland”, “Landlorde”, “take vpon”, “enter”, “possession”, “Intrvsione”, “keepe out” などの、土地資本とその所有権に関連する表現がくどいほど繰り返されていることに、十分な注意を払う必要がある。

何故なら、すでに指摘したように、この兵士の独白がもたらす効果とは、観客の反応を導き、その劇のそれ以降の展開にある特定の意味や方向性を付与するものであるならば、ここで強調される土地資本への眼差しは、*The Massacre* 後半部の受容を大きく規定する、あるいは少なくとも、後半部の意味や内容と関連すると考えることは妥当であると思われるからである。もちろん、*The Massacre* のテキストの現状を踏まえれば、the Collier leaf の指示する方向性と「3 Henri の戦い」の場面間に、緊密な有機的対応関係を指定することは困難と言わざるを得ないが、それでも、ある程度はこの両者の間に土地資本をめぐる言説の循環を確認することができるのではないであろうか。そして、正にここに、本劇の劇的構造との関連で、the Collier leaf が持ついま 1 つの重要性を確認することができると考えられるのである。

7. おわりに

最後に、本論の主旨をまとめることで、結論に代える。

- (1) The Collier leaf は、実際の上演に近い位置にあったマニユスクリプトである。
- (2) The Collier leaf における兵士の独白は、狂言回しのな機能を有し、*The Massacre* 前半部が宗教的対立を前景化した場面であることを観客に再認識させるが、その際マスカット銃が重要な役割を果たす。
- (3) プロテスタンティズムの蔓延を疫病の感染とリンクさせる特異な台詞は、この効果を助長・増幅している。
- (4) *The Massacre* 後半部は、「3 Henri の戦い」と呼ばれる、王権をめぐる権力闘争を扱っている。

- (5) The Collier leaf の兵士の独白で多用される土地資本への執拗な言及は、*The Massacre* 後半部の受容をコントロールする形で機能している。

注

- * 本論は、平成 23～25 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）「エリザベス朝演劇文化の誕生に作用した大学才人と英国国教会の接触に関する動態的研究」（課題番号 23520282）の成果の一部である。
- ** 本論の作成に当たっては、福岡教育大学名誉教授原口春海先生およびその御家族から、貴重な文献の提供を受けた。記して感謝の意を表します。
- *** フランス語文献の解説に関しては、筑波大学人文社会系吉野修准教授の教示を得た。記して感謝します。
- 1 Patrick Cheney, ed., *The Cambridge Companion to Christopher Marlowe* (Cambridge: Cambridge UP, 2004) xvii.
 - 2 H. J. Oliver, ed., *Dido Queen of Carthage and The Massacre at Paris* (London: Methuen, 1968) liii. *The Massacre* からの引用およびその場面区分への言及、また the Collier leaf からの引用はすべて同書に拠る。
 - 3 Oliver lii-lxi.
 - 4 Laurie E. Maguire, “Marlovian texts and authorship,” *The Cambridge Companion to Christopher Marlowe*, ed. Patrick Cheney (Cambridge: Cambridge UP, 2004) 41-54.
 - 5 この場面に対応する 8 折版の台詞を以下に引用する（レヴェルズ版 19 場冒頭）。
Enter a Soldier [with a musket].

Sold. Sir, to you, sir, that dares make the Duke a cuckold, and use a counterfeit key to his privy-chamber door; and although you take out nothing but your own, yet you put in that which displeaseth him, and so forestall his market, and set up your standing where you should not; and whereas he is your landlord, you will take upon you to be his, and till the ground that he himself should occupy, which is his own free land--if it be not too free; there's the question. And though I come not to take possession (as I would I might), yet I mean to keep you out--which I will, if this gear hold. What, are ye come so soon? Have at ye, sir!

Enter MUGEROUN. The Soldier shoots at him and kills him.

Enter the GUISE [and Attendants].

Guise. Hold thee, tall soldier, take thee this, and fly. [*Gives money*]

Exit Soldier.

Lie there, the King's delight and Guise's scorn!

Revenge it, Henry, as thou list or dare;

I did it only in despite of thee.

(xix. 1-16)

- 6 J. Q. Adams, “The *Massacre at Paris* Leaf,” *The Library* 4th ser., XIV (1934):

447-69.

- 7 Oliver lviii; MaGuire 46.
 8 Shakespeare が、劇作家としては先輩の Marlowe を様々な面で意識していたことは、いくつかの戯曲に残された証拠から確認することができるが、この劇的技巧に関しても、Shakespeare が Marlowe から学習した可能性を措定することができるかも知れない。
 9 P. H. Kocher, “Contemporary Pamphlet Backgrounds for Marlowe’s *The Massacre at Paris*,” *Modern Language Quarterly* 8 (1947): 151-73 and 309-18.
 10 後世の例になるが、*Les Trois Mousquetaires* (『三銃士』) (1844) など知られる Alexandre Dumas は、戯曲 *Henri III et sa cour* (『アンリ 3 世とその宮廷』) (1829) でこの情事に取材している。
 11



この画像は時間的に異なる 2 つの場面を合成して描いており、左半分が 1572 年 8 月 22 日に発生した Coligni 提督の暗殺未遂事件を、右半分が 8 月 24 日に生じた提督殺害を描写している。

- 12 Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (New York: Charles Scribner's Sons, 1971) 86.

参考文献

- Marlowe, Christopher. *Dido Queen of Carthage and The Massacre at Paris*. Ed. H. J. Oliver. London: Methuen, 1968. Print.
 ————. *The Jew of Malta and The Massacre at Paris*. Ed. H. S. Bennett. London: Methuen, 1931. Print.

- Adams, J. Q. “The *Massacre at Paris* Leaf.” *The Library*, 4th series 14 (1934): 447-69. Print.
- Barroll, Leeds. *Politics, Plague, and Shakespeare’s Theater: The Stuart Years*. Ithaca: Cornell UP, 1991. Print.
- Beem, Charles, ed. *The Foreign Relations of Elizabeth I*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Carroll, Stuart. *Martyrs and Murderers: The Guise Family and the Making of Europe*. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.
- Cheney, Patrick, ed. *The Cambridge Companion to Christopher Marlowe*. Cambridge: Cambridge UP, 2004. Print.
- . *Marlowe’s Republican Authorship: Lucan, Liberty, and the Sublime*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009. Print.
- Deats, Sara Munson, and Robert A. Logan, eds. *Placing the Plays of Christopher Marlowe: Fresh Cultural Contexts*. Aldershot: Ashgate, 2008. Print.
- Diamond, Jared. *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*. New York: W. W. Norton, 1997. Print.
- Elam, Keir. “‘I’ll Plague Thee for That Word’: Language, Performance, and Communicable Disease.” *Shakespeare Survey* 50 (1997): 19-27. Print.
- Hadfield, Andrew. *Shakespeare and Republicanism*. Cambridge: Cambridge UP, 2005. Print.
- Honan, Park. *Christopher Marlowe: Poet & Spy*. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.
- Kirk, Andrew M. “Marlowe and the Disordered Face of French History.” *Studies in English Literature, 1500-1900* 35.2 (1995): 193-213. Print.
- Kocher, P. H. “Contemporary Pamphlet Backgrounds for Marlowe’s *The Massacre at Paris*.” *Modern Language Quarterly* 8 (1947): 151-73 and 309-18. Print.
- Kuriyama, Constance Brown. *Christopher Marlowe: A Renaissance Life*. Ithaca: Cornell UP, 2002. Print.
- Mayer, Jean-Christophe, ed. *Representing France and the French in Early Modern English Drama*. Newark: U of Delaware P, 2008. Print.
- McNeill, William H. *Plagues and Peoples*. Garden City, NY: Anchor, 1976. Print.
- Thomas, Keith. *Religion and the Decline of Magic*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1971. Print.
- Totaro, Rebecca, ed. *The Plague in Print: Essential Elizabethan Sources, 1558-1603*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2010. Print.
- and Ernest B. Gilman, eds. *Representing the Plague in Early Modern England*. New York: Routledge, 2011. Print.
- . *Suffering in Paradise: The Bubonic Plague in English Literature from More to Milton*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2005. Print.
- Well, Judith. *Christopher Marlowe: Merlin’s Prophet*. Cambridge: Cambridge UP, 1977. Print.

- フィリップ・エルランジェ. 磯見辰典編訳. 『聖バルテルミーの大虐殺』. 東京: 白水社, 1985.
- 所荘吉. 『火縄銃』. 東京: 雄山閣, 1989.
- パート・S・ホール. 市場泰男訳. 『火器の誕生とヨーロッパの戦争』. 東京: 平凡社, 1999.
- ジュール・ミシュレ, 大野一道・立川孝一監修. 『フランス史—III 16世紀ルネサンス』. 東京: 藤原書店, 2010.
- 村上陽一郎. 『ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊—』. 東京: 岩波書店, 1983.
- 山本太郎. 『感染症と文明—共生への道』. 東京: 岩波書店, 2011.

The Massacre at Paris 展開図

Scene	The French Monarchy ヴァロワ家 Charles IX・Henri III	The Guise ギーズ家 Henri	Navarre ブルボン家 Henri IV
1			Charles IX の妹 Marguerite と結婚 (1572. 8. 18) Guise を中心としたカトリック側の謀略が話題に
2		Navarre 皇太后暗殺のため、薬屋に毒手袋を用意させる Coligni 提督を銃殺するよう兵士に指示 長い独白で、王位への野心を語り、宗教を策略の一環としてこき下ろし、Navarre 王への敵意と、国内の敵の処理を語る	
3			皇太后が 毒殺 され、提督が銃で腕を撃たれ負傷する (1572. 8. 22)
4	皇太后 Catherine が Guise 等と虐殺の相談をする 提督が銃で狙撃されたことが王に報告される	皇太后 Catherine が Guise 等と虐殺の相談をする 提督が銃で狙撃されたことが王に報告される	
5		Guise や Anjoy, 貴族たちが集合し、虐殺の幕開けに提督を 刺殺 する (1572. 8. 24—30) 虐殺の合図の大砲を発射させる	提督が 刺殺 される
6・7		虐殺の現場。ユグノーの説教者 Loreine を 刺殺 する	
8		ギーズ派の Mountsorrell, ユグノーの Seroune を 刺す	

9		Ramus の論理学を Guise が非難する。Ramus は弁明するが, Anjoy に <u>殺される</u> Navarre 王の連れてきた教師たちを Guise が <u>刺殺</u> する	
10	兄王が死去の場合, フランスに戻るという条件で, Anjoy, ポーランド王となる		
11	2 人の兵士が, 提督の死体の処理について話し合う Charles IX がユグノー寄りに傾いたので, 皇太后は彼を暗殺する計画を語る	Guise が, ユグノーの集会を剣で襲撃する計画を語る	
12		Guise, 5・6 人のユグノーを <u>殺す</u>	
13	Charles IX, 突然の <u>心臓病</u> (<u>毒殺?</u>) で死ぬ (皇太后の手による) (1574) 皇太后はポーランドより Henri を呼び戻すことにする		Navarre 王は身の危険を感じ, 国に戻り, 軍隊を召集することにする (当時ナヴァールは, スペインの支配下にあった)
14	Henri III 即位。寵臣への愛情を示す (1574) 皇太后は, Henri III が寵臣に夢中なのを心配する Lorraine 枢機卿が, 兄 Guise がブルボン家に備えて, 兵を召集したことを伝える 皇太后は, 国王 (=息子) を傀儡とする意図を述べる		
15		Guise, Mugeroun 宛の夫人 (妊娠中) の手紙を奪い, 激怒する。Mugeroun への復讐を計画する	
16			信仰のため, Guise・ <u>教皇・スペイン王と戦う決意</u> を, Navarre 王は述べる Guise が差し向けたフランス軍が追っているとの報告
17	Henri III, 対ナヴァール軍の将に Joyeux 公を任じる Henri III, Guise 夫人の愛人の件で, Guise を愚弄する	Guise は激怒し, Henri III の寵臣への溺愛を非難し, Mugeroun への復讐を誓う	

18			Joyeux 公の戦死を受けて、Navarre 王は勝利を宣言し、イングランド女王と協力して、 <u>スペインをナヴァルから追い出す</u> 意図を語る
19	<p>Henri III が Guise による兵の結集を非難すると、</p> <p>Henri III は、<u>Guise の背後</u>にいる教皇とスペイン王を非難し、Guise に軍の解散を命じ、</p> <p>パリの市民の Guise への歓迎ぶりを聞き、Henri III は Guise の殺害を考える (1588. 5. 12 「パリケードの日」)</p>	<p>兵士がマスカット銃で、Mugeroun を<u>射殺</u></p> <p>Guise が Henri III への敵意と破滅の意図を述べる</p> <p>Guise はユグノーからの自衛のためだと言い逃れようとする</p> <p>Guise も取りあえずそれに従う</p>	
20			<p>Guise が Henri III に対して拳兵し、パリ市民も王に反旗を翻したとの知らせを聞き、Henri III に援軍を出すことにする</p> <p>また、<u>Guise の野望とローマ・カトリックとの結び付き</u>を警戒する</p>
21	<p>Henri III は、<u>Guise の生前</u>の政治行為 (特に教皇やスペインとの関係) を列挙し、その野心を攻撃する</p> <p>Guise の息子に殺害現場を見せる</p> <p>Guise の兄弟 2 名の暗殺を命じる</p> <p>皇太后は Guise の死を悲しみ、共謀者がいなくなったことを嘆き、Henri III を呪う</p>	<p>Henri III に面会した後、傲り高ぶるが、Henri III の刺客に<u>刺殺</u>される (1588. 12)</p> <p>自らをシーザーに喩えながら、ヴァロワとユグノーを呪う</p>	
22		暗殺者 2 名、Lorraine 枢機卿を <u>絞殺</u> する	

23		Dumaine 公爵, 兄 Guise の死を知り, 復讐を誓う 修道士が, Dumaine 公爵に, 枢機卿の絞殺を伝え, 王の暗殺について告げる	
24	<p>Henri III, Navarre 王と和解した上で, パリを包囲しようとする</p> <p>修道士が <u>毒ナイフで Henri III を刺す</u> (1589. 8. 2)</p> <p>Henri III は, イングランド大使代理に向かって, <u>ローマ・カトリックへの憎しみと復讐と破滅を語り</u>, イングランド女王への愛を誓う</p> <p>Henri III は, Navarre 王を後継者に指名する。教皇とパリに対する復讐を望む</p> <p>イングランド女王に挨拶を送ることを頼みながら, Henri III は死ぬ</p>		<p>Navarre 王は, <u>ローマ・カトリックに対する復讐を誓う</u></p>